



原田文孝

はらだ ふみたか / 1956年岡山県生まれ。兵庫県加古川市で肢体不自由養護学校に31年勤める。教員退職後も障害福祉の職場で障害の重い人たちとかがわり続ける。NPO法人ささゆり会代表

私に

# 人生と

## 言えるものが

### あるなら



が利用者さんの人生の聞き書きを始めるようにしていったのです。

聞き書きを一つの形にしたのが「思い出の味の再現」です。「子供の頃の母親の味や子育てをしてきた頃の家庭料理など、利用者さんの思い出に残っている味について聞き書きをし、それをみんなでつくって味わう、という試み」だと説明しています。そして、もう一つが「人生すごろく」です。利用者さんの人生の聞き書きをして、すごろくゲームにしてみんなで楽しむものです。

### 「人生すごろく」の準備

私は、「人生すごろく」の実践の構想を遠山さんのお母さんに伝え、35年間（3年前の実践）の遠山さんの人生の出来事を書き出してもらいました。遠山さんの誕生日が4月9日なので、誕生会に1回目をしたと考えて、準備を始めました。遠山さんと一緒にお母さんのメモを見ながら、いろいろな出来事の中から選んで、すごろくのコマをつくっていきしました。遠山さんは、小さい頃のこと覚えていないようですが、養護学校入学前後の頃のことは覚えていて目をよく動かして応えていました。横で聞いてい

## 第7回 運がいいとか悪いとか

遠山さんは、現在38歳です。38年前、「生後1年以内に死亡することが多い」と医師から言われた遠山さんと家族は、どんな人生を生きてきたのか、その濃密な人生の一端をお伝えします。

### 高齢者の介護施設で人生の聞き書きを

生活介護の実践で、遠山さんの「人生すごろく」をしました。

六車由実さんは『介護民俗学という希望』（2018）の中で「大学で民俗学を研究していた私が、様々な理由により大学を退職し、介護の世界で働き始めるようになって知ったのは、老人ホームやデイサービス等の高齢者の介護施設が実は『民俗学の宝庫』であるということだった」と述べています。そして、介護民俗学は「民俗学で培われてきたものの方や聞き書きによって、介護現場のお年寄りたちの歩んできた人生に真摯に向き合うことで、人が生きることの意味や人間の営みの豊かさについて考えていくための方法だと言っている」としています。六車さんは、「利用者個人の生き方を尊重した介護を」と言われるが、利用者の生き方を知るための手がかりもないまま介護しているのが現実なので、職員

た職員が、思い出のエピソードを知っていて話が盛り上がることもありました。1週間でコマづくりができました。コマは、上半分に「何年、何歳、出来事」を書き、下半分に「そのコマでの活動内容」を書いていきます。

例えば、「1986、0歳、誕生・経管栄養・人工呼吸器」「誕生日の歌」という感じでした。誕生日に「人生すごろく」を始めてから1ヵ月間ぐらい毎日ではありませんが続けていました。

### 遠山さんの人生を共有する時間

遠山さんが覚えていてよく楽しんだコマは、「1995、9歳、遠山の金さんに裁かれる」「さくらふぶき」です。メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパンに夢を叶えてもらった遠山さんは、日光江戸村のお白洲で遠山金四郎に裁かれたのです。そのエピソードを話しながら、私がお金さんに扮して、啖呵を切ります。

また、「2001、15歳、高御位山・乗鞍岳登山」「ささゆりの歌」は、たくさん山の山に登っている遠山さんが初めて大勢の人と山登りを始めた年です。私も一緒に登りましたので、たくさん思い出話ができるのです。

「2003、17歳、2004、18歳、欽ちゃんの仮装大賞予選落ち」は、書類審査を通過して、大阪の読売テレビで実際に仮装したのですが、落ちてしまったエピソードです。私たちは、負け惜しみで「人工呼吸器をつけている人の仮装を笑えるほど、まだ、日本の文化は成熟していない」と言っていたものです。遠山さんにとっても思い出深い体験です。

遠山さんが、よく目を動かして「それそれ」と言っていたのが、1994年8歳の夏にプールに沈んだり、冬山で雪に埋もれて低体温になったりした話です。

また、1998年12歳の修学旅行で広島に行ったとき新幹線の入り口が狭くて車いすが乗れなくて、しばらく新幹線を止めたことのエピソードです。この時代のことは、よく覚えているようです。「1987、1989、1998、心停止」「もう1回できる」は、「遠山さんは、3回よみがえってきたよ。不死鳥だね」と参加者に言っていました。

このように、遠山さんを囲んで、遠山さんの人生を共有していく時間は、遠山さんにとってとても楽しい時間になっていきました。